# 恋と、冒険家。

遠く離れてしまう恋、共に冒険へと出かける２人、冒険の最中に出会い恋に落ちた者もいる。生命を賭して山へ登り、氷の世界を進んだ男たちは、どんな恋愛をしていたのか。残された手紙や妻の言葉から辿る、冒険家の孤独。切実で、甘美な瞬間がそこにはあった。

## Adventurers

旅先で命を落とした冒険家が残した、
タフでスイートな、３つの恋のパターン。

河野兵市

サハラ砂漠縦断時の河野。日本を発つ前、このリヤカーに最初に乗せたのは、愛する娘だったという。

1991年、パキスタン・ウルタルⅡ峰を登攀中の長谷川。テクニックが必要とされる難度の高い山だった。

長谷川恒男

植村直己

極寒の北極圏での楽しみは、テントの中で手紙を書くこと。いつも、公子さんの体を気遣っていた。

## 冒険の地で出会い、恋に落ちた２人の物語。

生死を懸けたような究極のシチュエーションで出会った2人は、その後の人生を共に過ごすことを、数ヵ月のうちに決めていた。登山経験のないままに、パキスタンのナンガ・パルバット登山に参加した順子さんは、そこで河野兵市という冒険家の真性を見る。「この人は、本物だなと会った瞬間に分かりました」と順子さん。登頂アタック隊に選ばれるために、ほかの作業を怠ける隊員もいるが、河野兵市は黙々と作業をこなし、サボらない。「〝本物〟の姿を世界に送り出すこと」が自分の役目だと悟った順子さん。会ってから数ヵ月、「なんのために生きるのか」という人生の価値観を共有できる相手を見つけた河野兵市は、登山を終え、降りてきたギルギットでプロポーズ。死と隣り合わせの冒険家と結婚をすることは「〝いつか別れる覚悟〟をもって歩きはじめなければ」ならないことだと、順子さんは記している。帰国後、サハラ砂漠の単独徒歩縦断の旅も、日本人初となる北極点への単独徒歩到達への出発の時も、順子さんは日本でいつもと変わらない生活をしながら見送った。「旅にでるときは、かならず自分の荷物をすべてきちんとまとめて、家をあとに」していた兵市に対する配慮だったという。夫婦どちらもが「人は役目を果たすために生きる」という根源を共有し、言葉にはならない覚悟でもって日々を送る。だからこそ、2人が過ごした時間は濃密なものになる。「生きることの本質」を、旅することによって世界に発信する冒険家。その生き様を支えることが「今も自分の役目なんだと思う」と、順子さんは語ってくれた。

『絆 河野兵市の終わらない旅と夢』芸能界でヘアメイクとして働いていた順子さんが、突然パキスタン登山へと参加し、冒険家・河野兵市と生活を共にした半生が綴られている。河野順子／河出書房新社。

### 河野兵市

こうの・ひょういち／1958年愛媛県生まれ。南米大陸自転車縦断、サハラ砂漠5,000kmを、リヤカーを引きながら単独徒歩縦断、カナダから北極点へ日本人初となる徒歩到達。2001年、北極点から故郷の愛媛まで歩くというプロジェクトの途中で遭難。帰らぬ人となった。

## 遠く離れた僻地から、妻を気遣う手紙を送る。

日本人として初めてエヴェレスト登頂を果たした直後、その足でマッキンリーを踏破し、世界で初めて五大陸最高峰登頂を果たした偉大なる冒険家。妻・公子さんとの出会いは、近所の串カツ屋さんだった。雑誌『coyote』に掲載された公子さんのエッセイには出会った当時のことが記されている。風呂上がりなのに「なんだか汚い人だな」と公子さんは思った。結納の翌日にはネパールに飛んでしまう。結婚する時には「山はやめます。1万2000キロだけには行かなきゃならない」と言ったそうだ。「さあこれで落ち着いて暮らせると思ったんですが、でもそんなのは嘘。彼は冒険をやめませんでした」

では、植村はその北極圏で何を思っていたのか。『植村直己 妻への手紙』で紐解くことができる。手紙の末尾に常に妻を気遣う言葉が記されているが、そこには「東京の方が交通事故でもっと危険だぞ」とか、「ねびえするなよ」といった何だか愛しい言葉が綴られている。一人テントの中で「若し男の子が生まれたら」と子供の名前を空想し、「公ちゃんをだますように、一緒になることを強ようしたこと、私の一方的に遊びにくれ、申し訳ない次第ですが」と離れて暮らすことを詫びる。だが、彼は冒険を続け、公子さんは「早く普通に暮らしたいな」と思い続けた。「とにかく夢中で暮らしていた」あの頃の緊張感が、懐かしいと公子さん。凡庸な暮らしなど拒否することが冒険家の資質。叶わぬ思いは、冒険家の宿命だったのか。「生きて帰ることが冒険」と語った植村直己の帰りを、公子さんはずっと待ち続けていた。

『植村直己 妻への手紙』冒険の最中、妻へと送られた手紙の数々。臨場感溢れる手紙は、知られざる人間・植村直己の姿を照射する。「私だけの植村直己物語です」とあとがきで公子さんは記している。植村直己／文春新書。

### 植村直己

うえむら・なおみ／1941年兵庫県日高町生まれ。冒険家。74年結婚。北極圏12,000キロの犬ぞりの旅へ出発。76年目的地アラスカに到着。84年2月世界初のマッキンリー冬季単独登頂に成功後、消息を絶ってしまう。『青春を山に賭けて』（文春文庫）など著書多数。

## 冒険へと共に足を踏み出す、愛のカタチ。

長谷川恒男は、孤高の人だった。マッターホルン北壁も、アイガー北壁も冬季の単独登頂は世界初。本当に心を許せる相手と出会ったのは、登頂成功のインタビューがキッカケだった。インタビューアーであった昌美さんと、インタビューイーであった恒男は、恋に落ちる。そして冒険に出る際にはいつも昌美さんが副隊長として、さまざまな許可取りや折衝を担当するようになる。結婚し、共に冒険をするようになった夫婦にとっては、自宅で一緒に食事をとることは「年に数えるほどしかないイベント」であり、登山中のキャンプにおいても、2人きりになるのは珍しいこと。さらに高度の高いキャンプへと向かう夫を、涙で送ることもあったという。2度目のパキスタン、ウルタルⅡ峰に挑んだ長谷川恒男。トランシーバーを通じ、ベースキャンプの昌美さんのもとに「雪崩発生」の連絡が届く。「いつものことだくらいに思いながら」も必死に祈るが、届かなかった。雪崩に巻き込まれてしまうと遺体が見つかる確率は非常に低いが、昌美さんは自分の目で「横たわる人の姿、見慣れたジャケット」を確認する。愛する人の不慮の最期を、自らの目で確認することの厳しさ。冒険家の恋愛とは、その厳しさを引き受けることなのかもしれない。夫婦間には、「雪崩で遭難しても、遺体は探すな」という約束があったという。しかし夫は、自ら捜索しやすい場所にまで転落してきた。昌美さんは、事故後、夫の願いであったパキスタンでの学校建設に尽力し、その思いを成就させる。孤高の冒険家の思いを繋ぐのが、冒険を共にした妻の愛だった。

『生きぬくことは冒険だよ』マッターホルン、アイガー、グランドジョラスという三大北壁への道のりのほか、インタビュー、昌美さんの随想などが収録された一冊。長谷川恒男／長谷川昌美・小田豊二編／集英社文庫。

### 長谷川恒男

はせがわ・つねお／1947年神奈川県生まれ。冒険家。マッターホルン、アイガー、グランドジョラスの三大北壁冬季単独登頂を成し遂げる。91年、パキスタン・ウルタルⅡ峰にて、雪崩に巻き込まれ落命。パキスタンに〈ハセガワ・メモリアル・パブリック・スクール〉を開校。



©毎日新聞社／アフロ（植村直己）、アルパインガイド長谷川事務所（長谷川恒男）、NPO河野兵市 心と夢クラブ（河野兵市）

text / Toshiya Muraoka